

## 未来につなげた生命と 生涯共に挑戦し続ける

安河内 聡 先生

長野県立子ども病院循環器センター長



### 小児科医への道

高校1年生の時に交通事故に遭い、3ヵ月間の入院を余儀なくされました。時間を持って余す入院生活中に将来をあれこれ考えていたところ、医者になるのもよいかもしれないという結論に至り、医学部に進学しました。なかなか専門を決めることができず、大学卒業後はローテート研修を実施している横須賀米海軍医療センター(現 横須賀米海軍病院)のインターン(1年間)になりました。米国基地内にあるインターンズクォーターズと呼ばれるインターン専用の宿舎に住み込み、24時間対応で研修に励みました。

インターン中は公私とも英語を使わなければならず、言葉の面では随分苦労しました。しかし、米国式の教育方針やシステムが私の性格にあっており、充実したインターン生活を送ることができました。①沈黙は無意味、②結論を先に述べる、③プランA、B、Cを考える、④患者について要領よく簡潔にきちんと要約するという厳しい指導方針のもと、内科、外科、小児科、産科(各2ヵ月)をローテートで、残りの期間は希望診療科として麻酔科(2ヵ月)と泌尿器科(1ヵ月)を選択しながら研修生活を過ごしました。研修生活で「未来ある子どもを助けたい」という漠然とした思いから、小児科医の道に進むことを決め、母校である信州大学医学部小児科医学教室に入局することにしました。

### 患者を未来とつなげる集中治療

入局翌日に担当したのは集中治療が必要な重症脳症の子どもでした。救命は難しいと周囲の先生方からいわれましたが、3ヵ月間集中治療室に寝泊りしてさまざまな先生の助けをかりて年齢相当の計算ができるまで回復することができました。この患者さんとの出会いから集中治療の無限な可能性を感じ、1人でも多くの子どもを救えるようになりたいと思うようになりました。幅広い知識の獲得するために地域治療(新生児)に力を入れていた北信総合病院に赴任しましたが、当時の長野県は大学病院をはじめ新生児を診ているどの病院も先天性心疾患などの心疾患を診断・治療することはできませんでした。そのため、専門的な診断・治療を必要とする心疾患を抱えている疑いがある新生児は、自衛隊の協力を得てヘリコプターで東京女子医科大学附属日本心臓血管研究所(現 東京女子医科大学心臓病センター)や国立小児病院(現 国立成育医療研究センター)、国立循環器病センター(現 国立循環器病研究センター)などへ搬送するのが常でした。そこで、長野県行政に対し長野県内で病的新生児をすべて診療できる体制を構築するための県衛生部長へ要望書を送付、信州大学に戻ってすぐに先輩有志と小児循環器外来を立ち上げるなど行動に移しました。しかし、大学病院でさえ小児循環器を専門にしてきた経験豊かな医師がおらず、結局は以前のように心臓病の子ども